

カナダ日本語教育振興会

Newsletter No. 35

Canadian Association for Japanese Language Education

ホームページ : <http://www.cajle.net>

December 12, 2007

巻頭言

ソウル紀行

楊 暁捷

私は現在研究休暇で東京に滞在している。先日、ある小規模の国際研究集会に参加するためにソウルを訪ねた。約五年ぶりの韓国旅行で、数々の思い出が出来た。

日本の中世文学をテーマに日本で研究生活を送ると、ふだん会話をしている周りの人間は、どなたもいわゆる国語国文学出身で、日本語とはきわめて遠い存在である。しかし韓国へ渡ってみると、新しく出会った人も、久しぶりに会う古い友人も、みんな何らかの形で仕事として日本語教育に携わっている。いわば同業者の思いを分け合い、自然と会話が弾み、そして内心、周りの看板など見た目以上に外国に来たとの実感を受けた。

韓国人の日本語レベルは高い。言語的に日本語と韓国語が近いなど、繰り返し議論される話題ではあるが、それでも実際の様子を伺うと、やはり驚くばかりだ。たとえばつぎのことを教えてもらった。日本語を専攻とする大学生の多くは二、三年生の時点で日本語能力試験一級に合格してしまう。ほとんどの大学は、一級合格をごくあたりまえのように卒業の必須条件とし、それをどうしてもクリアできない生徒には、代替りの試験を用意したりしてフォローするような政策もあるが、あくまでも例外とのものである。日本国内では、一級合格は、留学生にとって大学入学のための基準だということから考えて、

目次

◆巻頭言	
ソウル紀行	楊暁捷 1
年次大会	
CAJLE2007を終えて	西島美智子 2
フレデリクトンの半月	新屋映子 4
◆特別寄稿	
カナダ日本語教育振興会への期待	5
..... 鈴木雅之	
浜松発「社会人を対象とした日本語教員養成	7
プログラム」について	原沢伊都夫 8
アニメでコース作り	柴田智子
◆学会便り	
国際表現言語学会の設立について	9
..... 野呂博子	
◆リレー随筆	
遅れを取り戻せる!?日本語の助数詞	10
..... 高崎麻由	
◆活動報告	
活動報告とこれからの活動案内.....	清水道子 12
CAJLE年史.....	畔上ラム智子、清水道子 19
BULLETIN BOARD	大江都 20
編集部便り	21

当たり前といえば当たり前だ。でも、カナダで日本語を教えていて、それがどれだけ難しいことかは、身をもって知らされている。

一方では、大学での講座設置の様子などを尋ねたり、観察したりすると、日本語関係の学科はほぼ例外なく日本語を外国語として習った韓国人が中心となって運営し、しかもその中では男性教官の数が圧倒的に多い。それに対して、母国語話者の日本人は、あくまでもお雇い外国人として大学の教壇に立つ。だが、それにもかかわらず、日本からやってきた先生方は、韓国の魅力に惹かれて、つい永く居てしまう。いうまでもなくそのような先生たちは学生にこよなく愛され、電車とかで偶然に出会う先生と学生との流暢な日本語での会話を傍から見て、やはり心温まる光景である。

いまや韓国では日本ブームといわれて久しい。実際にソウルの街角を歩いているだけでも、それを実感することができる。われわれ十数人の小グループは、電車を使って会場への移動を繰り返し、どこでも遠慮なく日本語で会話をしますが、それでもさほど周囲か

らの特別な視線を感じない。繁華街や地下鉄の看板などは外国語を併記し、それがほぼ韓国語、英語、日本語、中国語という順番を保つ。だが、実際に市場などの人々に会話を持ちかけると、英語よりも日本語がよく通じる。夜遅くまで繁華街の道端の特設ステージで歌や踊りのパフォーマンスが続き、登場するアイドルたちの服装や仕草には、やはり日本の影響が目立つ。一方では、新聞や書籍の文章からは漢字が急速に消滅した。古典資料では韓国の文献も漢字頼りに親近感を持っていただけに、どこことなく寂しく感じた。

短い滞在の最終日、すべての活動が終わったあとの真夜中近く、親しい韓国人の友人に案内していただいて、清溪川の川沿いを散歩した。ソウル市内の幹線道路を取り除いて古い川を再現して、二、三年前に完成したとのこと。韓国の底力を覗いたような思いだった。

年次大会

CAJLE2007 を終えて

今年も、無事に年次大会を終えることができた。例年通り、この大会の実施までには、ほぼ一年をかけて企画準備を行ってきたので、大会委員会の役員一同、この学会が成功を収めて終了したことに、心からほっとしている。大変なこともたくさんあり、気を揉んだり、反省させられたりしたことも少なからずあったが、良いチームで仕事ができ、また講師

CAJLE2007 大会委員長 西島 美智子の先生方や参加者の方々とのすばらしい交流ができた充実感、かけがえのないものと感じる。ここで、4日半にわたる大会を振り返ってみたい。

今大会の参加者数は、合計43名と、これまでの大会に比べて小規模な大会となった。これは、開催地が、カナダの中でも主だった都市から離れ、さらに日本からも直行便のない、ニューブランズウィッ

ク州のフレデリクトンだったことが理由の一つだったと考えられる。また、州都ながら人口5万人の小都市には、日本人の数も少なく、日本語教育に携わっているのは、私自身、一人のみという環境で、地元からの参加者が限られることも予想されていた。しかしながら、研究論文発表者数はほぼ例年通りだったこと、カナダ、日本、アメリカ、サウジアラビア、ベトナムの5か国にわたる居住国から参加があり、さまざまな研究発表が行われたことは、大変良かったと思う。

何しろ、CAJLEの年次大会がアトランティック・カナダで行われたのも初めてだったが、このような日本語教育に関する行事が開催されたのも初めてとあって、CBCテレビが第一日目に取材に来て、同日のローカルニュースに放映されたくらいである。当地の人々にとって、新鮮なニュースだったと察することができよう。今大会を開催するに当たり、大会委員会では、良い研修の機会とすると同時に、この地で行う特徴を生かした大会にすることを目標としよう、という方針を打ち出し、プログラム内容を決めて実施していったが、その方針に沿った成果が上げられたものといえよう。

教師研修会では、明海大学の井上史雄先生に「社会言語学と日本語教育」について、さまざまな調査資料をもとに、地域、世代、性などによる言語差やその変化を大変興味深くお話しいただいた。社会言語学の分野の講義は、ここ数年、CAJLE大会での研修会の候補に挙がっていたこともあり、アンケートの中には、カナダで井上先生のお話が聞けるとは思わなかった、という感想もあった。カナダからは、ヨーク大学の太田徳夫先生に「カナダにおける日本語遠隔教育」というテーマで、先生が開発してこられたプロジェクトについてお話しいただいた。アトランティック・カナダの大学とヨーク大学との間で始まった日本語遠隔教育を紹介していただく意味でも、ちょうど機を得た内容だった。そして、国際交流基金派遣、アルバータ教育省日本語教育アドバ

イザーの室屋春光先生には、国際交流基金による「日本語教育スタンダード(仮称)」策定の背景や、その検討について、現段階の状況として説明していただいた。今後も注目していきたいテーマだったといえる。さらに、英語とフランス語を公用語とする、ニューブランズウィック州の言語教育の特徴を、ニューブランズウィック大学の Joseph Dicks 氏と Paula Kristmanson 氏の両先生に紹介していただき、第二言語教育の教授法について話しあう機会となった。

大会3日目には、今大会の締めくくりともいえるべき、パネルディスカッションが行われた。「今の日本語と日本語教育」というテーマのもとに、井上史雄先生、宇佐美まゆみ先生(東京外国語大学)、川口義一先生(早稲田大学)に、社会変化や価値観の変化によって起こった言語変化、また敬語表現の捉え方についてお話しいただき、フロアからも活発な質問が出された。3時間の枠では時間が足りないと感じられるほど、内容の濃いディスカッションが展開し、アンケートにも、大変良かったとの意見が多く見られた。急きょ参加をキャンセルされる結果となった王伸子氏に代わって、このセッションの司会を立派に務めてくださった大江都会長に、拍手を送りたい。

そして、CAJLE年次大会恒例のお楽しみも、例年に劣ることなく、企画実行することができた。市内のホテルで行われた懇親会では、アトランティック・サーモンの夕食をご賞味いただきながら、なごやかな親睦の場としていただいた。夕食後には、いつもユニークな「楽器」で座を盛り上げてくださる川口先生が、新しい「マトリョーシカ人形」とともに演奏をご披露くださり、楽しいひとときを演出してくださった。また、「カナダの過疎地、ニューブランズウィック」の魅力を紹介したいと、こちらに住みはじめてから私が撮り続けていた写真を、スライドショーとしてご覧いただいた。今大会のおみやげ話に加えていただけたら、幸いである。

さらに、参加された方々の多くが楽しみにしていたのが、オプションの、プリンスエドワード島見学ツアーだった。三日間の大会開催中、ずっと快晴に恵まれていたというのに、この日に限って、（誰かのせいで…？）朝から雨模様となってしまい、それが何とも残念だったが、「赤毛のアン」ゆかりの地を実際に見て廻っていただき、参加された方々には、たくさん写真を撮っていただくことができた。ツアーリーダーの大江氏が手配を担当された昼食やロブスターの夕食、そして一泊した宿泊施設も、みなさまの良い思い出としていただけたものと思う。

こうして振り返ってみると、改めてさまざまなエピソードがよみがえってくる。参加人数が少なかったのは残念だった反面、いつも以上に全体がまとまって、一体感のある大会となったといえるのではないかと思う。長年 CAJLE の大会に参加してこられた方から、「今までで一番良い大会だった」とのコメントをいただいたのも、新たな大会のあり方を試みたことへの、一つの成果だったと受けとめたい。

最後に、この大会を成功に導いてくださった方々および機関に、この場をお借りして、深くお礼申し上げます。講師招聘のための援助をいただいた国際交流基金、室屋先生の派遣にご協力くださった国際

交流基金トロント文化センター、三日間の大会プログラムを通してご出席くださった、同センターの鈴木雅之所長および斉藤典子氏、また、大会を開催したニューブランズウィック大学からは、施設および機材使用のための援助、学部長や学部スタッフの協力をいただいた。そして、企画・準備・実施の戦力として、ともに長距離マラソンを走ってくださった、大会委員会の役員、大江都氏、下條光明氏、杉本陽子氏、渡並美和氏の多大な協力なしには、今大会の実現はなかったものと痛感する。さらに、大会に参加された他役員理事である、小室リー郁子氏、清水道子氏、竹井明美氏、レベッカ・チャウ氏にも、快くご協力をいただいた。最後に、今大会に、遠方よりはるばるお出でくださった参加者のみなさまに、心よりお礼申し上げたい。

今後も、カナダ各地での日本語教育を振興するために、大都市のみでなく、さまざまな地域で CAJLE の年次大会を開催していくことができれば、すばらしいと思う。今回の経験を布石とし、反省すべき点は改善しながら、これからも魅力ある年次大会を企画実施していけることを願っている。

フレデリクトンの半月 —CAJLE2007 年度年次大会に参加して—

新屋 映子（桜美林大学）

開催地はカナダの最東部、という程度の予備知識しか持たないままに、夜、フレデリクトンに降り立った。旅行社の人も知らない地名であったのも納得の小さな空港だ。とても寒い。摂氏 8 度だと言う。震えながら空港の外に出ると、青味を残した空に半月が高くかかっていた。美しかった。

これまでいろいろな学会に参加してきたが、今回初めて参加した CAJLE 年次大会は、学会というものが専門や志を同じくする者同士の貴重な触れ合いの場であることを改めて強く感じさせてくれた。空港から始まった大会役員の方々を始めとする皆様との出会い、休憩時間や昼食時の情報交換や気取ら

ないおしゃべり、どれもこれも温かく、笑顔が絶えなかった。研究発表、教師研修会、パネルディスカッションなどのプログラムのそれぞれが熱を帯び、充実したものとなり得たのは、ここまで準備してくださった西島大会委員長を始めとする皆様の大変なご苦勞の賜物であることは言うを俟たないが、同時に、役員の方々の人柄、チームワークの良さに負うところも大きかったのではないだろうか。また、こんなことを言うと叱られそうだが、今回参加者がそれほど多くなかったことも幸いしたように思う。発表者や講演者との距離が近く、拝聴しているだけではなく、参加しているという実感を持つことができた。一人ひとりが世界の各地で、それぞれの事情を抱えながら日本語教育に真剣に、地道に取り組んでいることを深く感じ、日本語教育への思いを共有できた数日間であった。こじんまりした大会もなかなかいいものだ。

さて、学会はもちろん職業に直結していて、純粹な旅とは言えないかもしれないが、遠出の学会の魅力の一つは、日常から脱出できること。ニューブランズウィック大学のキャンパスも、キャンパスからの眺望も、日ごろ猥雑な都会に棲息する身には心を洗われるような美しさであった。木にはかわいい林檎が生り、リスがちょろちょろしている。正直なところオプションツアーに惹かれて迷わず申し込ん

だ大会参加であったが、プリンスエドワード島のメルヘンはフレデリクトンから始まっていたのだ。キャンパス内の宿舎も、部屋には素朴な木のベッドと箆筒、共同洗面所、という期待？に違わぬ簡素さで、非日常的な旅気分を味わわせてくれるものであった。学生時代に戻れたようで、負け惜しみでなく、うれしかった。レストランで開かれた懇親会では、隣同士に座ることになった初対面のイギリス人の先生がかつて私の亡兄の同僚であったことが判明し、二人で思わず手を取り合って泣いてしまうという不思議な出会いもあった。ほんの数日の短い滞在であったのに、思い出は尽きない。

フレデリクトンの月は今も美しく輝いているだろうか。

執筆者のプロフィール

広島市出身。27年前に日本語教育というものに出会って以来、<ことば>にはまっている。現在は大学の雑務、いや大事な仕事に追われ、十分にことばと遊べないのが不満。専門は日本語の文法。特に名詞に関心がある。1988年東京外国語大学で修士号取得。2008年9月から1年間、愛猫と離れウィスコンシン大学マディソン校で研修の予定。ウィスコンシンのお近くの皆様、よろしくお願いします。

特別寄稿

カナダ日本語教育振興会への期待

鈴木 雅之（国際交流基金・トロント日本文化センター所長）

カナダ日本語教育振興会は来年で設立20周年を迎えると伺いました。おめでとうございます。ネットワークを作り、それを20年の長期にわたり維持・発展させていくことは、大変なご苦勞とご努力があっ

たことと思います。特に、教育現場における日常業務からすれば、CAJLEの仕事はいわば業務外のボランティアといってもよい位置づけになるのではないかと思います。カナダの日本語教育の振興を目指

してCAJLEに関わってこられた皆様に心から敬意を表したいと思います。

私が本年3月にトロントに着任してから約7か月が過ぎました。8月にはニューブランズウィック大学で開催されたCAJLE大会に参加しました。この学会では参加した先生方の日々の研究の成果に触れ、知識・経験を皆でシェアしてカナダの日本語教育を少しでもよいものにして行こうという熱意を感じることができました。またこの間、トロントを始めとして、オタワ、モントリオール、バンクーバー、カルガリー、エドモントン各市を訪ね、多くの先生方とお話する機会がありました。カナダの広さと日本語教育の多様性が、ようやく少しずつわかり始めてきたところです。

まだまだカナダの日本語教育のほんの一端に触れたに過ぎませんが、この7ヶ月の経験を通じて私が感じたのはCAJLEという組織が今後さらに重要になるのではないかとということです。参加者相互間のネットワーク強化、情報シェア、日本語教育に関する経験知識の研鑽といった役割が重要であることはいうまでもないのですが、これらに加えて、以下の2つのことを申し上げたいと思います。

1) 教室の外へのアンテナ

先ごろ公表された2006年実施日本語教育機関調査の結果によれば、全世界の日本語学習者数は前回2003年調査の約236万人から約298万人に増加しています。カナダ一国を見てみると20,457人から23,834人に増えています。

日本では、外務大臣の諮問機関である「海外交流審議会」が、2007年6月に「日本の発信力強化のための5つの提言」を外務大臣に提出しました。その

提言では「日本語教育拠点を100か所以上に展開する」ということが触れられています。

これらの情報はカナダで教える皆様とどのような関係があるのでしょうか。

カナダという国のある日本語教育機関で教えている教師の皆様の位置を知るために世界の日本語教育の分野において起こっていることにアンテナを常に張り巡らしている必要があると思います。CAJLEのネットワークはまさにこうしたアンテナのひとつとして、今後も重要な役割を果たして行くのではないかと思います。

2) 日本語教育外の分野の専門家たちとの交流チャンネル

例えば、ビジネス分野で働いている方、外交や行政の分野で活躍している方、あるいは、日加の枠組みの外側で研究を行っている他の学問分野の専門家、これらの人々からみて、カナダの日本語教育はどのように見られているのか。彼らの期待やニーズに当てているのか。こうした問を自らに投げかけ、自分たちが行っている人材育成というサービスのクオリティコントロールをしていく。そのためにも他分野の専門家との交流が必要ではないかと考えます。CAJLEは、一人ではできない他の分野とのチャンネル作りの場としても重要だと考えます。

日本語教育に携わる皆様が様々な課題と格闘する中で、20年を迎えるこのCAJLEのネットワークは従来にも増して重要になってくるのではないかと考えています。カナダの日本語教育に本当に必要なものは何か、その中で国際交流基金に何ができるのか、皆様と一緒に考えていきたいと思います。皆様からの忌憚のないご意見をお待ちしております。

浜松発「社会人を対象とした日本語教員養成プログラム」について

原沢 伊都夫（静岡大学国際交流センター）

平成19年10月より浜松学院大学において文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」の委託事業である「多文化共生社会の構築に資する日本語教員養成プログラム」が開始された。このプログラムは在日南米人の人口が日本最大である浜松市において大学と地方が一体となり、多文化共生社会を実現するための人材を育成するものである。おそらく日本で初めての試みであり、このプロジェクトに関わっている者として、その概要について簡単に報告したい。

日本に居住する南米人（その中でも特に日系ブラジル人）は、1990年に改正された「出入国管理及び難民認定法」により日本への定住が認められるようになり、容易に日本に入国することができるようになった。その結果、日本で働くために来日する日系ブラジル人数が急増した。現在これら日系ブラジル人の滞在の長期化により、日本の文化・習慣への適応、子弟教育、青少年の犯罪増加、就労環境などの様々な問題が日本各地で表面化し、在日ブラジル人が日本社会にいかに対応し地域社会と共生していくかが大きな課題となっている。

静岡県浜松市はホンダ、ヤマハ、スズキなどの企業に代表されるように、製造業とともに発展してきた都市であり、そのような下請け企業で働く日系ブラジル人が数多く居住している。市内にはブラジル街ともいえる一角ができ、日本で一番多くのブラジル人が住む都市として有名になった。ブラジル人居住者の急増に伴い、浜松市も様々な問題に直面するようになったが、それらの中でも、教育問題は特に深刻で、日本の学校への不適応などの不就学に伴う青少年犯罪の急増もあり、在日ブラジル人子弟への教育問題の解決が急務となっている。その対策の一つとして、地域のボランティアが主体となり、在住ブ

ラジル人やその児童に日本語教育を行ってきているが、専門知識の不足や人材不足のため、なかなか思うように進んでいないのが現状である。

今回のプロジェクトの目的は、そのような問題を抱える浜松地区において、高度な専門性を備えた日本語教師を大学と地域が一体となって養成することである。これは、浜松の多文化共生社会実現を側面から支えることになり、まさに地域が求めるニーズに合致した計画であるといえる。受講生は「日本語学系」「日本語教育系」「言語学・言語生活・日本事情系」の三つの分野から合計13科目（26単位）を取得すれば、日本語教員資格（日本語教育副専攻）を取得できる。講義の中には、地域と連携した「浜松多文化事情」や「多文化共生論」などがあり、また日本語教育関係のNPO法人や浜松国際交流協会などと協力して、日本語教育実習も行う。コースは社会人を対象としているため、講義を夜間にも開設し、昼夜集中の半年コース、昼間だけの1年コース、夜間だけの1年コースの3コースが設置された。このような社会人に対する便宜だけでなく、このプロジェクトの一番の魅力は学費の安さだ。それぞれのコースで、3万5千円の受講料（1科目だけでなく、すべての科目）は破格の安さとなっている。数字が一桁違うのではないかと思った受講生も多かったと聞く。

8月に文科省の採択が決定し、それから実質的なスタートを切ったため、募集期間は1か月にも満たなかった。それにもかかわらず、第1期生の募集には、40名の定員に対し、約100名もの応募者が殺到した。実際には50名でのスタートとなったが、年代も20代から60代まで幅広く集まり、浜松におけるニーズの高さを物語っている。

私は今回のプロジェクトでは、「日本語文法Ⅰ」

と「異文化理解入門」の講義を担当し、このプロジェクトの事業評価委員に任命された。実際にスタートして1ヶ月半が経ったが、受講している社会人のモチベーションは非常に高い。2年半の短期のプロジェクト

ではあるが、浜松地区の共生社会実現に向けて、多くの優秀な人材を輩出するのは間違いないと確信している。

質問：日本はとかく言葉と文化を教えれば異文化に溶け込むことができると思いきりであるが、カナダの社会では、移民の人々に、自国の文化を保てる場所、機会を提供することにより、異国の文化により溶け込み易いと考えている。皆さんの周りにもそのような実例がありませんか。ご意見をどうぞ。（編集部）

執筆者のプロフィール

大学卒業後、ブラジルとアメリカでの長期滞在を経て、オーストリア国立大学大学院で日本語応用言語学を学ぶ。帰国後、民間の団体で海外研修生の受け入れを担当。その後、地元の短期大学設立に参加し、専任講師となる。現在静岡大学国際交流センター学生交流部門長、教授。専門は日本語学および日本語教育、異文化理解教育など。現在の趣味は伊豆の海でのシュノーケリングとガーデニング。

アニメでコース作り

私は鉄腕アトムやジャングル大帝を見て育ち、アニメなしには子供時代を語れないほどのアニメ好きだ。そんな私が突然中級レベルのコースでアニメのみで授業を行うことになった。選ばれた作品は『千と千尋の神隠し』（鈴木、宮崎、2000）。この作品や他のアニメを授業に利用している機関は他にも多くあるようだが、アニメだけ、しかも一つの作品だけを取り上げて、コースを作るというのは、先例がないのではないだろうか。

このアイデアは学科長から出たものだが、彼の鶴の一声で実施が決まり、中国語におされ気味の昨今、学生の日本語への興味を喚起するものとして期待された。不安も大きかったが、とにかく『千と千尋』の絵本を主教材にすることにし、そのテキストから語彙と文法項目の洗い出しをした。テキスト自体も、漢字を常用漢字に打ち直したものをコースパケットとして用意し、絵本を買わせることで著作権をカバーした。

さあ、いよいよこれを使って教えることになった。まず、夏季集中講座でこの教材を試用し、その時の

柴田 智子（プリンストン大学講師）

先生方の努力の結果、この教材は学生から好意的に受け入れられた。次の段階はこの教材を通常の学期に大学で教えることだ。そのコースの担任である私は、授業でスライドやビデオクリップを使い、日本語の4技能を高め、文化知識を増やすことができるようなコースを目指そうと頭をひねった。最初、学生は興味津々でこのアニメに飛びついた。しかし、アニメとは言え、主教材は長いテキストで読解力が必要になる。すぐにテキストのあまりの難しさに、文句が出始めた。この教材には非常に多くの未習語彙が含まれており、必須語彙を制限したが、それでもクイズは週2回で一度に30以上の漢字語句と言葉を覚えなさいといけなかった。毎週、文法・語彙と内容の宿題が課せられ、それぞれが非常に長かった。ある学生などは、内容の宿題に7時間もかかったとこぼした。学生たちは語彙と漢字の消化不良に陥り、授業も特に語彙練習は全く思うように進まなかった。しかし、回が進むにつれ、勉強の仕方に慣れたのか（又は文句を言っても無駄と諦めたか）文句が減っていった。そして、ストーリーが佳境に入るに

従い、内容の話し合いがどんどん面白いものになっていった。また学生は、学科長の文化や作品の背景情報の話に常に目を輝かせて聞き入った。コース中に、スキットをさせたり、宮崎作品や日本のアニメについてのスピーチを書かせて発表させたりといったプロジェクトも行った。そしてコースは無事終了した。学生からは好評が寄せられたが、中にはやはりアニメのみを扱ったことに関する不満を述べ

た者もかなりいた。

私はこのような冒険をすることには大賛成である。が、それには教師がその冒険をする意義を信じているべきであろう。私はたまたまアニメ狂で、このコースを心底楽しんだが、アニメに全く興味があれば冒険に対する不安が学生に伝わってしまったかもしれない。あなたはアニメを授業で使いますか。

質問：「あなたもアニメを授業で使いますか。」これまで、使い慣れた教材を変えたり、まったく新しいものを取り入れたりした経験がありますか。／先日クラスインタビューの折に一人の韓国人の学生が「ハニーとクローバー」という日本アニメの写真を持ってきてそれについて話してくれました。内容が同年の美術科の大学生たちの物語で共通性を感じて面白いと言っていました。教材として使えそうなアニメをご存知の方、是非聞かせてください。（編集部）

執筆者のプロフィール

1996年に渡米。アイオワ大学に在学中、TAとして日本語を教えながら、1999年に日本語教育で修士、2005年に第2言語習得論で博士号を取得。専門は音声・音韻学。主に日本語学習者の韻律の問題、発達について研究している。現在、プリンストン大学東アジア研究学部の日本語講師。趣味は漫画とアニメ、ペットたちと遊ぶこと、そして高校生の子とJ-Popを聞いたりJドラマを見たりすること。

学会便り

国際表現言語学会の設立について

野呂 博子（ビクトリア大学）

外国語教育に関し演劇・ドラマが持つ可能性について、なぜかいままで言語教育界でとりあげられることはあまりなかったようです。しかし、演劇は、話し言葉全般、すなわち会話から独り言まで、人間が話すさまざまな種類の言語形式を使った芸術活動であり、いわば、話し言葉の運動場、話し言葉の訓練をする上で最適な場であると思われます。

外国語のクラスにおいて演劇・ドラマは次のような言語教育効果を生み出します。

1) 目標(target)言語を用いて、意味のある、流れ

のあるインターアクションが生まれやすいこと

2) 音声、韻律上の特徴が、断片的でなく、インターアクティブでコンテキストのある場面で学べる

こと
3) 語彙や表現が、断片的でなく、意味のあるコンテキストの中で学べる

こと
4) 目標(target)言語を習得する上で自信が生まれる

こと
5) 話し言葉に必ず伴う身振り、表情、間、話し手同士の距離などの非言語的要素も自然な形で学べ

ること

言語教育における演劇・ドラマの持つ可能性に関心のある人々が集い、話し合う機会を持つという趣旨で企画された第一回国際表現言語会議 (Performing Language: International Conference on Drama and Theatre in Second Language) は、カナダ・アメリカ・日本・イスラエルからの参加者50名余りを迎え、カナダ、ビクトリア大学で2006年2月に開催されました。演劇界で活躍する劇作家、演出家、俳優、応用演劇学、応用言語学の研究者、ESL、日本語・スペイン語・フランス語の教育実践にたずさわる教師、また大学院生など、多様な背景を持つ参加者が3日にわたり、学術論文発表、演劇ワークショップなど、理論と実践の両面から外国語教育における演劇やドラマの持つ可能性を模索しました。参加者全員の、第二回国際表現言語会議開催に対する熱望を受け、2007年11月、早稲田大学で第二回会議が開催されました。初めての大会開催に関し、英語教育、日本語教育に携わる方々、また表現言語ということで、スポーツ報道関係者など、主催者側の予想を超える分野から反響をいただいています。

言語教育において演劇的な試みを続けてきた人々、また演劇界において言語とコミュニケーションに深い関心を持つ人々が専門の枠を超えて、共に

支援、刺激し合う場を確保する必要性が高まっているように思えます。このような場からもたらされる創造的、実践的、かつ学問的成果は測り知れないものがあります。私どもの学会が言語教育の実践と研究、また演劇の実践と研究に携わる方々の出会う場、またその出会いによる刺激があらたなエネルギー生む場となることを祈っています。

国際表現言語学会設立発起人一同 (五十音順)

川口義一 (早稲田大学大学院日本語教育研究科長)
橋本慎吾 (岐阜大学留学生センター助教授)
平田オリザ (劇作家、劇団青年団主宰、駒場アゴラ劇場支配人、大阪大学教授)
野呂博子 (カナダビクトリア大学太平洋アジア学科日本研究プログラムコーディネーター)
松田弘子 (俳優、翻訳家)
M. コーディー・ポールトン (カナダビクトリア大学太平洋アジア学科長)

お問い合わせ

野呂博子まで。hnoro@uvic.ca

学会ホームページ

<http://web.uvic.ca/pacificasia/IAPL/>

リレー随筆

遅れを取り戻せる！？日本語の助数詞

日本語教育で一つの学習項目となっている助数詞。使い分けの複雑さや数詞による音の変化など、日本語学習者にとっては習得が難しく、正しく使えるよ

高崎 麻由 (トロント日本語学校)
うになるまでにはかなり時間を要する項目であろう。この助数詞の複雑さは、日本語を母国語とする子どもの成長段階で、数の概念の習得にどう影響するの

だろうか。私はこの秋、トロント大学心理学部のある教授の依頼で、このテーマに関するデータを集めてきた。この研究の結果はなかなか興味深いものだったので、ご報告したいと思う。

日本語で数を数えるとき、1から10までは「いち、に、さん…」と「ひとつ、ふたつ、みつつ…」の二通りあり、どちらを使うかは人による。また物の数を数えるときは、「ひとつ、ふたつ、みつつ」の他に助数詞を用いた「一個、二個、三個」のどちらかを使う。これに助数詞の使い分けも加わり、英語のように全て「one, two, three」とはいかないのが、日本語学習者にとっては面倒なことだろう。実はこの複雑さは、日本語を習得する子どもにもある種の困難を招いているようだ。

子どもは一般的に二歳の誕生日前後の時期に数の単語の習得をし始める。しかし、数の言葉を覚えただけでは数の概念は習得できない。子どもはまず「いち」という言葉を覚え、「いち」が「に」や「さん」とは異なる概念を持つことを理解する。「ひとつ取って」と言えば一つ取ってくれるが、「ふたつ取って」と言うと五個くれる、というように、「1」だけがわかる段階にいる子どもを、心理言語学では「one knower」と呼んでいる。それから六ヶ月くらいたつと、今度は2が1とも3以上とも違うことがわかっていき、彼らは「two knower」になる。次が「three knower」。さらに4までわかるようになると、数のシステムを理解し、4以上の数の言葉も実際の数の概念と一致するらしい。

このように子どもはいくつもの段階を経て数を理解するのだが、日本語を話す子どもと英語を話す子どもを比較すると、日本語を話す子どものほうが平均的に遅く習得し始めるという結果が出た。実際に二歳児で比較すると、日本語話者ではone knowerすら珍しいのだが、英語話者では数の習得を完了している子どもさえいる。

なぜ日本語を話す子どもには初段階で遅れが出てしまうのか。はっきりとした理由付けにはならない

ものの、助数詞(個、枚、匹)を識別させるテストなどの結果、日本語を話す子どもは五歳になってやっと助数詞の種類が識別できるようになることがわかった。助数詞はそれまで毎日のように聞いているはずなのだが、習得にはかなりの時間がかかっている感じだ。また、数を数えるときに使う「いち、に、さん」と「ひとつ、ふたつ、みつつ」、これら「二種類ある」という複雑さも、習得時期のばらつきの原因になっている可能性がある。実際、「いっこ、にこ、さんこ」しかわからない子ども、両方わかる子ども、それに加えて「ひとつ、ふたつ、みつつ」しかわからない子どもまでいて少し驚いた。余談ではあるが、最近「ひとつ、ふたつ、みつつ」まではわかって、「よつつ」以上の言葉は知らない子どもも多いそうで、個数を数えるときは「一個、二個、三個」が主流のようだ。

ただ、日本語の数の習得開始が遅いからといって悲観する必要はない。早ければいいというものでもなさそうなのだ。日本語話者は三歳では「one knower」から数のわかる子どもまでのばらつきがあり、四歳ではほぼ全員が数を理解するのだが、一方英語話者はというと、三～五歳通してばらつきがみられ、五歳になっても数が全て理解できない子どももいるのである。つまり、日本語話者が数を理解し始めてから習得してしまうまでの時間が、英語話者と比べ短いのだ。

さて、結果的に、この実験から導き出されたことは、日本語を話す子どもは助数詞などの複雑さにより、数の概念を理解するまでに時間がかかるが、一度理解し始めれば習得は早いということだ。この結果が大人の日本語学習者にはあてはまればいいのにと、現実的ではないが思ってしまう。ただ少なくとも、日本語学習者へのなんらかの手助けになるヒントが、今後見えてくるかもしれない。

さて私の報告はこの辺にして、リレーのバトンを名古屋大学の池田佳子先生に受け取って頂くことにしました。私がトロント大学の修士課程に入りたて

の時、ティーチングアシスタントをさせて頂いた、

とても尊敬している先生です。

質問：これが、フランス語になると、よけい難しくなるでしょうね。例えばフランス語の80は *quatre-vingts* すなわち 4×20 。こうなると掛け算が数を知る段階で入ってくるようになるわけだから。日本語の数は九九などを覚えるのが、ずっと簡潔ですね。それとも、フランス語系のように、複雑になればなるほど頭の運動になるでしょうか。(編集部)

執筆者のプロフィール

福岡市出身。幼少の頃ドイツに住み、学部ではフランス語を専攻しフランスに留学。これらの留学・外国語学習経験から日本語教育に興味を持つ。大学卒業後、2005年に日本語会話ワークブック一体型教科書「プチ日本語で!!」(ALMA出版)を出版。その後カナダに留学し、2007年にトロント大学東アジア研究科にて日本語言語学の修士過程を卒業。今年から CAJLE の役員になり、トロント日本語学校で教えている。趣味はお菓子作りと最近始めた陶芸とロッククライミング。

活動報告

活動報告とこれからの活動案内

2007年度年次大会活動報告

2007年度年次大会は、国際交流基金、及びニューブランズウィック大学の多大な援助協力を得て、8月21日(火)より23日(木)までの3日間にわたり、ニューブランズウィック大学(UNB)を会場に、開催された。なお、4日目の24日(月)と25日(火)の2日間、自由参加によるプリンスエドワード島見学ツアーが実施された。開会式には、在モンリオール、日本国総領事館、西岡 淳総領事及び、国際交流基金トロント日本文化センター鈴木雅之所長より祝辞をいただいた。

例年通り、研究論文発表、教師研修会、パネルディスカッション、情報交換会、教材展示即売が行われた。今年は、「今の日本語—そしてカナダにおける言語教育の今」のテーマで、昨年の「生きた日本語に続き、今、日本語がどのように変わってきているか、実際に使われている日本語を、日本語教育の現場でどのよう

に扱っていけばよいか、さらに、カナダにおける言語教育の動きなどが取り上げられ、研修会及び、3名のパネリストによる活発な話し合いを通して紹介された。

教師研修会第1日目は、明海大学の井上史雄教授による「社会言語学と日本語教育」のテーマで社会言語学の立場から、方言・若者語・敬語に焦点を当て、現代日本語の多様性についてお話していただいた。第2日目の研修会2では、ヨーク大学、太田徳夫先生による「カナダにおける日本語遠隔教育のテーマで、カナダにおける言語教育に焦点を当て、昨年度、実験的に行われた日本語遠隔教育講座についてお話しをしていただき、今後の可能性と課題についての考察が導入された。また、教師研修会3では国際交流基金アルバータ州教育省アドバイザー、室屋春光氏による、「日本語教育スタンダード(仮称)及び、カナダ版日本語教育振興キットについて」のテーマでご自身が携わっ

ておられる「カナダ版日本語教育キット」についてのご報告をいただいた。第3日目、研修会4では、英語とフランス語を公用語とするニューブランズウィック州の特性を取り入れた第二言語教育プログラムの実践報告がニューブランズウィック大学・第二言語教育研究所の教授2名、Prof. Joseph Dicks と Prof. Paula Kristmanson により行われた。更に、3日目のパネルディスカッションでは、明海大学 井上史雄教授、東京外国語大学大学院、宇佐美まゆみ教授、早稲田大学大学院 川口義一教授のパネリストを迎えて、「今の日本語と日本語教育を考える」のテーマで、日本語の変化に伴い、実際に使われている日本語を、日本語教育の現場でどのように扱っていけばよいかについて、話し合いがなされた。多文化共生の視点に立って、時代の流れに沿った使いやすい日本語、親しみやすい日本語、男言葉、女言葉にかかわらず現場で使用される日本語、言語社会での日本語教育において、人間関係をより円滑に保つためのポライトネス、敬語の使い方を教えることが大切であるなど、貴重な討論がかわされた。研究論文発表は8月21日、22日、午前2日間にわたり2会場同時進行にて、アメリカ、カナダ、日本から合計25名の参加発表があった。今年度のテーマ、「今の日本語—そしてカナダにおける言語教育の今」を反映して、教育現場からの実践に基づいた研究が発表された。

なお、大会2日目の夜、フレデリクソン市内のクラウンプラザホテルで懇親会が行われた。テーブルを囲んで、和やかな会食の後、川口義一先生の見事な楽器？を使ったお馴染みのテーマソング数曲の演奏、西島美智子氏のニューブランズウィック州の自然を撮影された写真の映写会などが催され賑やかな親睦会となった。昼休み中の教師間の情報交換や、恒例のCAJLE 出版物、にほんごサークルの教材展示即売及び井上史雄先生の出版物数冊の展示が行われた。大会参加者数は、アメリカ5名、カナダ24名、サウジアラビア1名、日本12名、ベトナム1名の計43名で、アンケートの総合評価も「とても良かった」78%、「良

かった」22%の評価を得て、成功裡に終わった。

年次大会プログラム及び、定例総会の詳細は次の通りである。

研究論文発表

発表者、タイトルは以下の通り。(プログラム順)

第1日 8月21日 (火)

研究論文発表1-1 (会場1) (205 Tilley Hall) 進行 小室リー郁子 (トロント大学)

有森丈太郎 (トロント大学) : 話題の再開における接続詞「デモ」・「デ」の役割

原田登美 (甲南大学) : 「～ていただく」の使用実態と日本語の配慮・丁寧さの表現

新屋映子 (桜美林大学) : 応答表現「そうです」の意味と用法

研究論文発表2-1 (会場2) (223 Tilley Hall) 進行 楠正子 (カリフォルニア州立大学ノースリッジ校)

ハウ博美 (トロント日本語学校) : 初級クラスにおけるシャドーイング導入の試み

高宮優実 (パデュー大学大学院) : 日本語教育における文化理解の試み—クリティカルペダゴジーの視点に基づいたブログプロジェクトの分析から—

新野悠子・米本和弘 (マギル大学大学院) : 外国語としての日本語学習への投資—ケベックの大学生の事例研究—

研究論文発表1-2 (会場1) (205 Tilley Hall) 進行 下條光明 (ニューヨーク州立バッファロー大学)

楠正子 (カリフォルニア州立大学ノースリッジ校) : 社会文化的考察による日本語習熟度と学習動機との相関関係

上野純子 (ユニオン大学) : 学習者を保持できない理由 : パイロット調査

研究論文発表2-2 会場2) (223 Tilley Hall) 進行 レベッカ チャウ (ブリティッシュコロンビア大学)

矢吹ソウ典子・アリスン デヴァイン谷村 (ヨーク大学) : Moodleを使ったオンライン日本語テストの試み—初級レベルの大学生を対象に—

虎谷紀世子 (ヨーク大学) : 日英翻訳コースの実践報

告

第2日 8月22日(水)**研究論文発表 1-3 (会場1) (205 Tilley Hall) 進行
新屋映子 (桜美林大学)**遠藤直子 (早稲田大学大学院) : 日本語学習者による
初級文型~テモイイのとらえ方について安達真弓 (東京大学大学院) : ベトナム語を母語とする
児童による日本語の名詞修飾構造の習得山下暁美 (明海大学) : 在日日系ブラジル人上級日本
語学習者の待遇表現の分析と考察**研究論文発表 2-3 (会場2) (223 Tilley Hall) 進行
レベッカ チャウ (ブリティッシュコロンビア)**広瀬研也 (キングサード大学) : 非母語話者の教師
養成ートルコでの5年間の試行錯誤ー高木裕子 (実践女子大学)・佐藤綾 (大邱韓医大) :
アジアで重視される日本語教師の実践能力とは何か平畑奈美 (早稲田大学大学院・中国帰国者定着促進セ
ンター) : 日本語教師に求められる「人間的資質」に
関する考察**研究論文発表 1-4 (会場1) 進行 虎谷紀世子 (ヨー
ク大学)**袴田麻里 (静岡大学) : 社内の日本語ー輸送機器製造
と情報処理サービスー原沢伊都夫 (静岡大学) : テアルにおける能動型と受
動型ー話者の認識という観点からー**研究論文発表 2-4 (会場2) 進行 平畑奈美 (早稲田
大学大学院・中国帰国者定着促進センター)**柴田智子 (プリンストン大学) : 日本語の話し方の習
得 : 韻律教育の必要性小室リー郁子 (トロント大学) : 「漢字」を知る学習者
への漢字指導のための基礎研究宇佐美まゆみ (東京外国語大学) : 自然会話教材の開発
とその意義についてー試作版の分析を通してー**教師研修会**講演者及び講師名、タイトルは下記の通り。(プロ
グラム順)**8月21日(火) 午後****教師研修会(1) 3時間**

「社会言語学と日本語教育」

講師 : 井上史雄 (明海大学)

8月22日(水) 午後**教師研修会(2) 1時間 30分**

「カナダにおける日本語遠隔教育」

講師 : 太田徳夫 (ヨーク大学)

教師研修会(3) 1時間 30分「日本語教育スタンダード及びカナダ版日本語教育振
興キットについて」講師 : 室屋春光 (アルバータ州教育省・国際交流基金派
遣)**8月23日(木) 午後****教師研修会(4) 2時間**「Innovations in Second Language Teaching in New
Brunswick」Joseph Dicks, Paula Kristmanson (University of New
Brunswick)**パネルディスカッション****8月23日(木) 午前3時間 (223 Tilley Hall) 司
会 : 大江都 (マウント・アリソン大学)**

「今の日本語と日本語教育を考える」

パネリスト : 井上史雄 (明海大学) 宇佐美まゆみ (東
京外国語大学) 川口義一 (早稲田大学)**プリンスエドワード島見学ツアー****8月24日(金)~25日(土) 朝 企画・リーダー 西島
美智子**赤毛のアンの故郷として知られるプリンスエドワ
ード島見学ツアー終日観光。シャーロットタウンに一泊
した後、翌日、自由解散。**2007年度定例総会**

会長挨拶 : 大江都会長

皆さま、お疲れのところご出席くださりましてあり
がとうございました。開会式で述べました通り、CAJLE
は1988年に発足いたしまして、来年は記念すべき20
周年を迎えます。これまでの19年間さまざまな活動
をまいりました。年次大会、ニュースレター、ジャ
ーナルCAJLEの発行、ホームページの開設、そして地

区の部会など広範囲の活動が進行中です。20周年と将来に向けて、まだまだ開発、改善すべき事など多々あると思います。これに続きまして、各部門の担当の方々から活動報告をしていただきますが、皆さまのご意見、ご承認をいただきながらより良いCAJLEを目指そう進めていきたいと思っております。よろしくお願いたします。

1 2006年度活動報告及び2007年度活動予定

(1) 2006年度年次大会及び定例総会（清水）

2006年度年次大会は、国際交流基金及び、同基金トロント日本文化センターの多大なるご援助とご協力をいただき、国際交流基金トロント日本文化センターにて、8月25日より27日までの3日間にわたり開催されました。基調講演は、ヨーク大学、言語・文学・言語学学科日本語科・韓国語科 主任 太田徳夫先生による「岐路に立つ日本語教育」のテーマで行われました。教師研修会4セッションは、カナダ、日本からの講師により、多岐に亘る指導法、実践法が展開されました。研修会1は、国際交流基金派遣、カナダアルバータ州教育省、日本語アドバイザーの室屋春光講師により「日本のポップカルチャーITを利用した教室活動」。研修会2、3は、「日本語音声の基礎」及び「日本語アクセントの基礎」のテーマで、東京大学大学院 上野善道教授による講義が行われました。研究発表4は、国際交流基金日本語国際センター有馬純一講師により「国際交流基金開発教材の紹介―使い方・指導の実際を中心に」のテーマで最近開発された教材の紹介―授業の進め方、教室活動、及び、現在制作中の教材の概要が数多く紹介されました。

2006年度定例総会は、8月25日（金）国際交流基金トロント日本文化センターにて開催されました。王伸子会長の挨拶の後、今年度は理事改選があり、桶谷仁美議長により旧理事、役員13名が紹介されました。旧理事は、全員推薦状を得ており、出席者の承認を得て、新理事として承認可決されました。この後、サマレル史子氏（欠席）、鈴木美知子氏、中尾良子氏、谷原公男氏4名が個人の事由に依り理事候補辞退を申し出て、

出席者の承認を得た後、新たに指名された被推薦理事候補7名を併せて16名が出席者一同の拍手を得て新理事として承認可決されました。（50音順位）畔上ラム智子、王伸子、大江都、桶谷仁美、小室リー郁子、斉田恭子、清水道子、下條光明、杉本陽子、竹井明美、レベッカ・チャウ、渡並美和、永瀬治郎、西島美智子、楊曉捷、ライリー洋子。（詳細は、ニュースレター33号をご参照下さい。）

(2) 2006年度部会活動及び2007年度活動予定

1. 発表企画部（下條）

2006年～2007年度の発表・企画部を私、下條光明とレベッカ・チャウさんの2人で担当しました。具体的な活動としまして、11月には、研究論文発表の募集要項を決定し、会員にメールにて募集要項を送付しました。そして、ホームページに募集要項を掲載しました。12月には、メーリングリスト掲載、ATJ ニュースレター掲載、Websiteに掲載、日本在住理事に論文募集呼びかけを依頼しました。社会言語科学会のメーリングリストは永瀬氏にお願いしました。その他個人のネット・ワークを通し募集を流しました。2月～3月には、応募論文の審査方法について大会実行委員会に提案しました。審査は、企画発表担当下條・チャウの二人で、3段階のポイント制で審査しこれに基づき 合計26本の応募論文、そのうち24本を採用、1本を次点、1本を不採用としました。その後、論文4本の辞退があり、次点を繰り上げて合計21本の論文、発表者計24名を採用しました。応募者への合否通知は5月7日、その後、大会研究論文発表プログラムの発送をし、7月～8月にかけて要旨集の作成が行われました。来年度の活動報告：年次大会における研究論文発表については2006～2007年度に同じです。

2. ジャーナル編集（桶谷[欠]→報告者：小室・リー）

ジャーナルCAJLE第9号は、厳選な審査の結果、8本の投稿論文のうち3本が採用されました。査読委員会の先生方は、プリンストン大学の牧野成一先生、

ブリテイッシュ・コロンビア大学の曾我松男先生、早稲田大学の川口義一先生、東京大学の上野善道先生、ビクトリア大学の野呂博子先生、そしてモントリオール大学の金谷武洋先生の6名にお願いしました。この第9号は本日の年次大会で会員に配布されております。

3. ニュースレター (楊[欠]→報告者：竹井)

今年度に於いては、ニュースレター33号、34号をいづれも予定通り刊行できました。発行の方法がオンラインに移動するに伴い、発送の数が減り、経費の節約になったと思います。今年度からニュースレターの編集部には、新たに竹井さん、ライリーさんが加わり、編集部員は、献身的に所定の作業に取り組み、編集のプロセスがいたってスムーズに進められました。各33、34号の二号のニュースレターに10点、継続あるいは新規の作品を掲載しました。とりわけ、33号には、新理事による自己紹介、年次大会を受けての特別寄稿、34号には、日本語弁論大会の地区大会、全国大会についての報告など、それぞれ特徴のある企画が行われ実行できました。お蔭で、二号併せて6人ほど、初めての執筆者に原稿をお願いすることが適えられました。なお、これまでの長期連載に代わり、「リレー随筆」という企画を始めました。ニュースレターの編集、発行については、これまで同様、原稿依頼は、おおかた協力的な対応を受けていますが、発行してからの反応は、いまだに全くゼロに近い状況です。なにかの形で読者の声を聞きたいというのが、編集部としての正直な感想です。今後も「リレー随筆」を続けていきたいと思いますので、会員の皆さんのご協力をお願いいたします。(楊曉捷)

4. ホームページ (西島)

ホームページは、私が受け付けをしまして、その内容の検討は楊先生と一緒にしました。テクニカルの方はすべて楊先生にお任せして掲載しております。非常に活用度は高く、今回の年次大会のお知らせ等もホームページを通して広く、早くお知らせすることが出来たことは大変に良かったと思っております。こ

れからも情報発信を主な目的として、会員同士の情報交換の場として更に活用を深めていきたいと思っております。

5. 宣伝・開発企画部 (王[欠]→報告者：チャウ)

今年次総会に於いては、活動内容の一部であるジャーナルCAJLEの活動のみ報告。

昨年凡人社に持ち込んだ計78冊をすべて買い上げていただきました。引き続き凡人社に販売を依頼する場合は、委託販売となります。学会の展示即売会場での提示、あるいは、営業販売担当者が各大学を回る際、宣伝してもらうこととなります。そして、日本からCAJLE本部へ、ジャーナルCAJLEの販売に関し、問い合わせがあった場合は、凡人社へ直接連絡を取るよう伝えてほしいと思います。

6. アトランティック部会 (大江)

まずはこのアトランティック・カナダで大会が開催され、皆さまにお集まりいただきましたこと大変に光栄に思っております。ご協力ありがとうございました。部会活動としては、昨年ご報告したこととほぼ同じ状況で、この春2007年3月、定例の日本語スピーチコンテスト地区大会を私が教えているマウント・アリソン大学で開催しました。カナダ大西洋岸四州には7大学ありその内、ノバスコシアにあるセント・メアリーズ大学、ニューブランズウィック大学、UNBに隣接の、西島さんがここでも教えておられるセント・トーマス大学と、マウント・アリソン大学の4校が参加しました。小規模ですが、なごやかに行われました。詳細はこの6月発行のニュースレター34号に記載されていますのでご一読ください。実は、開催予定日の前日、雪嵐の予報が入り急遽話し合いの結果、開催日を1日延期しての大会となりました。そのために参加学生数は多少減りましたが、参加の先生方、審査員の皆さまも予定変更に対応してくださり、無事遂行の運びとなりました。皆で何とか集まれた、という思いから、いつにも増して和やかな会であったと思います。スピーチコンテストの他には、現在活動はなく、会員は西島さんと私のみです。宣伝もしており、これからも活動は

続けて行きたいと思っております。例えばセント・メアリーズ大学には2名のNon native, Non Japaneseの男性教師がおり、スピーチコンテストには、積極的に参加していますので、こちらから引き続き情報を流して勧誘を続けていきたいと思っております。来年もまた、新しいことが出来るように努力していきたいと思っております。

7. オンタリオ部会 (鈴木[欠]→報告者 杉本)

オンタリオ部会では、NJCA (新移住者協会日本語プロジェクト) との共催により、以下のワーク・ショップや活動をいたしました。1. 日本語教師研修活動、2. 継承日本語教育講演会、3. 調査プロジェクトを開催しました。教師研修会は、小室・リー郁子氏によるワーク・ショップ「話し言葉教育を考える」、継承日本語教育は、鈴木美知子氏の講演会「家庭に於ける継承日本語教育の実践」、調査プロジェクトは、清水道子氏他による「プラー・チャレンジ」、私立日本語学校でのオンタリオ・クレジット取得に関する調査、説明会、報告が行われました。このプラー・チャレンジの調査は、2005年2月に始めてより、専門講師によるオリエンテーション、担当教師による体験経過報告、調査経過報告を通して、2007年2月まで約2年間の活動を経て、トロント地域及び近郷の各日本語学校や機関への広報活動の役目は果たしたと判断し2006年度を以て活動を終了しました。部会の今後の活動予定はNJCAとの活動を維持しながら、各企画を計画、開催していく予定です。詳細に関しましては、ニュースレター34号、今後は、35号に掲載しますのでご参照ください。

2 2006年度会計報告及び2007-2008年予算案 (渡並[欠]→報告者: 杉本)

- ・ 2006年度会計報告は収支項目に沿ってプリント配布と共にテープで流された。
- ・ 昨年事務所の閉鎖に伴い、キー・デポジット代\$80をNAJCより返金された。(報告の1部)
- ・ 2007年度～2008年度予算案も同様にプリント配布、テープで説明、提出された。

・ 会計年度を6月1日(2007)から5月31日(2008)までに変更、承認された。

・ 国際交流基金からの援助\$5,448.00は、今年の大会の資金のための援助資金で、来年度の分ではない、それを含めての予算案であることが、口頭で説明された。

承認及び可決: 報告の承認と予算案が拍手で可決された。

3 2006年度理事会決議事項報告及び承認 (小室・リー議長)

1. オンラインCAJLE理事通信用メーリングリストの設置が理事の永瀬治郎氏の提案、お骨折りにより開通することになった。(Oct. 17決) 報告のみ。

2. オンタリオ部会、アトランティック部会の位置付けについて (報告のみ)

オンタリオ部会、アトランティック部会は基本的には理事会、理事とは直接関係ないものと考えられる。CAJLEの会員が自発的に、自由に参加出来、その地域でグループを構成して活動を行っていく。活動資金はCAJLE本部から出されるということはあるが、活動自体は理事会の小委員会とは全く異なるので、ジャーナルその他の理事小委員会部門の枠外に部会名を記すことに決まった。(Oct. 17決)

3. www.cajle.net にCAJLEホームページのアドレス変更。(Oct. 19決) 報告のみ。

4. 宣伝・開発企画委員会」の準備活動発足の承認 (報告)

① 桶谷仁美氏の提案のもとに、かねて日本での宣伝開発に努められた王伸子氏及び日本での広報担当を承諾された永瀬治郎氏の3名による「宣伝・開発企画委員会」の準備活動が発足した。2007年の大会での承認まで準備活動の形式をとる。また、王氏がこれまで担当された日本での広報活動については、「宣伝・開発企画委員会」の一部として引き続き王氏、永瀬氏が担当する。(Nov. 25決)

② 凡人社向け販売用ジャーナルCAJLEに関しては、宣伝・開発部の王伸子氏が担当する。(Jan. 28決)

報告内容：宣伝・開発企画委員会、準備活動の発足が理事会で決まったが、まだ、委員会では話し合いの段階で、今後委員会及び理事会で、オンライン等で話し合っただけで決まった時点で報告することになった。

4. 理事選出：(小室リー議長)

一改選なし。

一2007年～2008年 現理事・役員の紹介：

会長 大江都

副会長 王伸子、楊曉捷、桶谷仁美

書記 清水道子、畔上ラム智子

会計 渡並美和、竹井明美

広報 楊曉捷、杉本陽子、西島美智子、ライリー洋子、竹井明美、永瀬治郎

ジャーナル 桶谷仁美、王伸子、大江都、小室リー郁子

発表・企画 下條光明、レベッカ・チャウ

2007年度大会実行委員長 西島美智子

年次大会(総会)後の移動報告及び状況

2007年度第1回理事会は、8月21日(火)、年次総会後、7時よりUNBアトリウムを会場で行われた。出席理事8名(大江都、小室リー郁子、清水道子、杉本陽子、下條光明、竹井明美、西島美智子、チャウ・レベッカ)で、全理事15名中7名欠席の理事会のため、総会承認事項に関する確認と、議題提案事項の報告及び、承認を含めて、第2回理事会に持ち越された。

2007年度第2回オンライン理事会承認事項

(Sept. 15. 2007-Nov. 26. 2007)

1. CAJLE 2008 大会期日は2008年8月15日より17日の3日間に確定した。

2008年大会では、大会委員長はおかない。代わりに、西島、小室、大江の三名が大会準備委員代表となる。委員会は、上記の三名のほかに、下條、杉本、竹井の三氏が加わる。

テーマ、プログラム、招聘講師(およびその内容)のまとめ：小室、大江

研究発表の部：下條

会計に関するまとめ：竹井、杉本

全体の補佐、まとめ：西島

交流基金への助成金申請書：西島、小室、大江の三名

準備企画上の会計の仕事：高崎、竹井、渡並の3名。

2. 会計交代の承認：

①高崎麻由氏が、新たに理事に加わる

②渡並美和氏が、理事を辞退する

③高崎麻由氏が、会計担当となる、

④高崎氏が会計の仕事に慣れるまで、渡並氏に指導していただく

これからの活動案内

2008年度の年次大会は、CAJLE 創立20周年を迎えての記念すべき大会となります。

この年にふさわしい大会となるよう特別なプログラムを企画しておりますので、どうぞご期待ください。

日程：2008年8月15日(金)～8月17日(日)

開催地：トロント(国際交流基金トロント
日本文化センター)

さらに、8月18日(月)には、カナダが世界に誇るナイアガラ滝への一日見学ツアーを計画しています。お楽しみに。なお、大会の詳しいご案内は、2008年5月に掲載を予定しています。

大会に関する問い合わせ：小室リー郁子

(ikuko.komuro.lee@utoronto.ca)

文責：清水

《年史》

2006年度 主な活動と内容 (2006年8月-2007年7月)

2006年 8月25日 -28日	<p>2006年度年次大会(国際交流基金トロント日本文化センター)後援国際交流基金及び同基金 トロント日本文化センター 大会実行委員長:谷原公男(ニューヨーク州立バッファロー大学)</p> <p>研究論文発表会(注1)発表1-1進行 王伸子(専修大学):畑佐一味・福田真樹子(パデュー大学)、池田佳子(トロント大学・ハワイ大学マノア校)、赤井佐和子(ヒューロン大学)、発表1-2進行 戸田貴子(早稲田大学):佐藤慎司(コロンビア大学)、大谷麻美(奈良大学)、発表2-1進行 三浦秀松(徳島文理大学・ニューヨーク州立大学バッファロー校):ショー出口香(パデュー大学)、左治木敦子(インディアナ大学)、野呂博子(ビクトリア大学)、発表2-2進行 桶谷仁美(イースタン・ミチガン大学):鈴木崇夫(名古屋外国語大学)、米本和弘(マギル大学)、平川眞規子(東京国際大学)、発表3-1進行 原田哲夫(早稲田大学):グループ発表 原田哲夫、戸田貴子(早稲田大学)、王伸子(専修大学)、発表3-2進行 野呂博子(ビクトリア大学):下條光明(ニューヨーク州立バッファロー大学)、石山治(ニューヨーク州立バッファロー大学)、高宮優実(パデュー大学)、発表4-1進行 赤井佐和子(ヒューロン大学):桑原陽子(福井大学)、柴崎秀子(長岡技術科学大学)、玉岡賀津雄(広島大学)、高取由紀(ジョージア州立大学)、レイノルズ・ブレット(ハンバー・カレッジ)、原田照子(桜美林大学)、山形美保子(朝日カルチャーセンター)、小野博(メディア教育開発センター)、発表4-2進行 下條光明(前記参照):王崇梁(国際交流基金日本語国際センター)、矢吹ソウ典子(ヨーク大学)、三浦秀松(前記参照)、浅野真紀子(サンフランシスコ州立大学)</p> <p>基調講演 講演者 太田徳夫(ヨーク大学 言語・文学・言語学学科日本語科・韓国語科 主任)「岐路に立つ日本語教育」。教師研修会(1)講師 室屋春光(カナダ アルバータ州教育省 日本語アドバイザー、国際交流基金派遣講師)「日本のポップカルチャーーIT を利用した教室活動」、教師研修会(2)講師 上野善道(東京大学大学院教授、日本語言語学会会長)「日本語音声の基礎」、教師研修会(3)講師 上野善道(東京大学大学院教授、日本語言語学会会長)「日本語アクセントの基礎」、教師研修会(4)講師 有馬純一(国際交流基金日本語国際センター専任講師)「国際交流基金開発教材の紹介ー使い方・指導の実際を中心に」</p>
8月25日	<p>2006年度定例総会(同会場) 会員実数130名。王伸子会長挨拶、2005年度部会活動及び2006年度活動予定。2005年度会計報告承認及び2006年-2007年度予算案提出と承認。本年度より Mr. Rudy Chan が振興会公認会計士に代わることに承認可決。2006年-2008年の理事選出。新たに16名が新理事に選出され承認可決。五十音順:畔上ラム智子、王伸子、大江都、桶谷仁美、小室リー郁子、斉田恭子、清水道子、下條光明、杉本陽子、竹井明美、渡並美和、レベッカ・チャウ、永瀬治郎、西島美智子、楊曉捷、ライリー洋子。</p>
8月25日	<p>日本語教材展示及び即売 にはんごサークル CAJLE 出版物展示及び即売 カナダ日本語教育振興会</p>
8月28日	<p>自由参加によるムスコカ湖日帰りツアー: ツアー企画 杉本陽子</p>
10月1日	<p>継承日本語教育講演会「幼小児時における第一言語を十分に育てることの大切さについて」講演 鈴木美知子(元トロント国語教室校長)CAJLE オンタリオ部会/ NJCA 共催、会場:トロント日系文化会館</p>
10月1日- 11月24日	<p>2006年度第二回理事会(オンライン) 2006年-2008年の会長大江都、副会長王伸子、桶谷仁美、楊曉捷に決定。理事の役職分担:書記 清水道子(チーフ)、畔上ラム智子 会計 渡並美和(チーフ)、杉本陽子、竹井明美、広報 楊曉捷(チーフ)、西島美智子、ライリー洋子、杉本陽子、竹井明美 発表・企画 下條光明(チーフ)、レベッカ・チャウ、ジャーナル編集 桶谷仁美(チーフ)、王伸子、大江都、小室リー郁子 宣伝・開発企画委員会 桶谷仁美、永瀬治郎、王伸子。斉田恭子 理事辞退。CAJLE ホームページのアドレス変更(注2)</p>
12月12日	<p>ニュースレター33号発行 編集長 楊曉捷</p>
2007年 2月4日	<p>日本語教師研修活動 「話し言葉教育を考える」講師 小室リー郁子(トロント大学)CAJLE オンタリオ部会 / NJCA 共催、会場:トロント日系文化会館</p>
3月18日	<p>「アトランティック・カナダ日本語弁論大会」アトランティック部会主催 会場:マウント・アリソン大学</p>
6月1日	<p>ニュースレター34号発行 編集長 楊曉捷</p>
<p>注1. 2教室、同時進行。2日にわたり研究発表25点(発表者数30名)。スピーチ指導者1名、ワークショップ4(名)。 注2. www.cajle.net</p>	
<p>文責:、畔上ラム智子、清水道子</p>	

<訂正: ニュースレター33号年史(23頁)のタイトルは「2004年度」と間違えた。「2005年度」と訂正させていただく。>

BULLETIN BOARD

今年も早、一年が終わろうとしています。会員の皆さまには、それぞれの仕事場で、忙しい毎日をお過ごしのことと思います。

CAJLE 最大の行事「年次大会」は、今年も滞りなく、素晴らしい成果を挙げて完行されました。実行委員長であった西島美智子氏の報告にありますとおり、アトランティック・カナダにおいて初めて開催され、参加者約 40 名、という小規模な年次大会ではありましたが、研究、研修の面からも、また、会員の交流の面からも、たいへん生き生きとした、充実した会でありました。お招きした講師の皆さま、参加された会員の皆さまから、たくさんのよいコメントをいただきました。ホームページには写真集が掲載されていますので、参加いただけなかった会員の皆さまにも、楽しそうな会の様子をご覧いただけたかと思います。

さて来年は、CAJLE が創立 20 周年を迎える記念すべき年です。CAJLE 2008 大会では、これまでの歴史を振り返り、会のために貢献してくださった方々に感謝を表すると同時に、新しい視野に立った企画を織り込むべく、実行委員会によって準備が進められています。2008 年は折りしも「日加修好 80 周年」の年でもあります。日本語教育に限らず広い分野からの参加も仰ぎ、示唆を得たいと考えます。場所は再び本部のあるトロントへと戻し、国際交流基金・トロント日本文化センターをお借りしての開催となります。多数の皆さまのご参加をお待ちする次第です。

暖冬が続いたここ数年ですが、今年の冬は寒さが格段に厳しくなるとの予報。皆さまには、お風邪など引かれませんように。すでに雪嵐に見舞われて白一色となったカナダ東部から、新しい年のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

会長：大江 都

《会 員 規 定》

カナダ日本語教育振興会は、カナダにおける日本語教育の発展と向上を目指す非営利組織です。日本語教育に関心のある方ならどなたでも会員として登録することができます。

会費年度：2007 年 6 月～2008 年 5 月

年会費： 連絡先がカナダの場合…CAD\$40.00、アメリカ及び南アメリカの場合…US\$40.00
上記以外の場合…US\$60.00 (いずれも郵送の場合は小切手または money order で)

申込必要事項： 氏名 (日本語およびローマ字)、現住所、電話およびファックス (自宅、職場の両方)、電子メールアドレス、所属機関。

申込先： Canadian Association for Japanese Language Education (CAJLE)
P.O. Box 75133, 20 Bloor St. East, Toronto, Ontario, M4W 1A0, CANADA

お問い合わせ： E-mail: mayu.takasaki@gmail.com (高崎)

(入会申込書は、ホームページをご覧ください。 <http://www.cajle.net>)

編集部便り

★ 日本滞在中の編集長とカナダ留守番組の編集部員とのニュースレター編集作業は、ゆったりとした時の流れの中で進んでいたように思います。いつもなら送ったメールの2、3分後には編集長からの返信が届いていたのですが、それが翌日になったりと時間の猶予を初めて許された編集でした。また、改めて「日本とカナダ」大きな時差のあることをしみじみと感じました。新屋先生の「フレデリクトンの半月」を読ませていただき、CAJLEが日本語教育だけではなく人と人との邂逅のお役にも立っていることを知り一人悦に入っています。本号は寄稿してくださった方々のCAJLEとのお付き合いの長さも、ご活躍の地域も、寄稿内容も様々で読み応えのあるものと自信を持って皆様にお送りできます。今年は久しぶりにカナダで過ごすクリスマスとお正月。どんな締めくくりができるのかと不安もありますが、明るい新年を迎えたいと思っています。皆様も良いお年をお迎えくださいませ。(杉本)

★ 今回の原稿はニューブランズウィックでの大会の模様に関して詳しい記事がたくさん寄せられ、出席できなかった私も誌上で十分に大会の様子を楽しませて戴きました。このニュースレターが私だけでなく多くの出席出来なかった方々に「来年は是非出席したい。」という思いを起こさせるのに少しでも役立つことができたらと願っております。師走とは良くいったもので、カルガリー大学も期末に入り、寝る時間を削っての追い込みに入っております。そんな合間にニューズレターの校正が入りいささか四苦八苦の状態でした。(ライリー)

★ ニュースレター35号発刊を前にして、編集を手伝った一人として今号のできばえにはかなり満足している。執筆者も日本各地から、カナダ全域から、アメリカから、日本語教師だけでなく、行政からも稿を寄せてくださっているし、内容も年次大会報告、国際学会からの便り、ソウル紀行、日本やアメリカからの教育実践レポート、随筆等とバラエティーに富んだものになった。校正するために送られてきた原稿を手にする時、まるで筆者の心の内に入り込むような錯覚に陥って胸がドキドキする。一文字一文字を慎重にたどり、確認しながら読み込んでいく作業は緊張するが、楽しいと同時に良い勉強にもなる。「文は人なり」というけれど、それぞれの「言霊」が伝わってくるようだ。このニュースレターが単に筆者から読者への言霊伝達に終わらず、双方向性のあるコミュニケーションの場となるよう、多くの読者からのメッセージが編集部宛に届くことを願っている。(竹井)

★ 夏の号に続き、今度のニュースレターの編集や仕上げの作業も東京で行った。久しぶりの集中した研究生生活の中で、20数ページに渡る原稿の校正やレイアウトは、思いっきりの息抜きだ。／東京生活と言えば、まずは暖かい。そしてなぜか東京は狭い。陽気な冬場に、一人自転車に乗って街中に出かけるのは、何とも快適だ。宿を構えている池袋から6キロ・40分の半径には、新宿、皇居、秋葉原が入る。自転車を走らせると、そこに駅周辺では見せてくれないまったく異なる東京があった。／研究の日常を綴って、「絵巻三昧」(<http://emaki-japan.blogspot.com/>)というブログを開設した。興味のある方はぜひ時々覗いてください。(楊)

今度のニュースレターには、特別寄稿や随筆を中心に「質問」という欄目を新たに加えた。読者からの参加をすこしでもしていただこうと、編集部一同のささやかな努力である。ぜひコメントや情報など上記編集部メンバー宛お寄せください。

CALL FOR PAPERS: Canadian Association for Japanese Language Education (CAJLE) 2008

Theme: Japanese: The Japanese Language in Transition and Its Education at Present
 Conference Date: August 15-17, 2008
 Conference Venue: The Japan Foundation Toronto
 Abstract Submission Deadline: April 10, 2008
 Notification of Acceptance: May 10, 2008

The Canadian Association for Japanese Language Education (CAJLE) is pleased to announce its 20th Anniversary Annual Conference, which is scheduled for August 15-17, 2008, at the Japan Foundation Toronto. The goal of the conference is to bring together teachers of Japanese across countries and disciplines and will consist of keynote lectures, panel discussions, paper presentations, and teacher workshops. There will also be an optional day trip tour to Niagara Falls on August 18.

We invite submission of abstracts for paper presentations on topics including, but not limited to, Japanese linguistics, Japanese language pedagogy, Japanese as a heritage language, as well as innovative teaching. Submissions related to the conference theme are particularly welcome. The time allocated for each paper will be 30 minutes including questions and discussion. We also welcome group submissions on a common theme. Presentations should be given in Japanese, though presentation in English is acceptable under special circumstances. Please send an attachment (.pdf or .doc file) containing the following to: shimojo@buffalo.edu (subject: "CAJLE 2008").

1) paper title (in both Japanese and English), 2) one-page abstract (in Japanese), and 3) name(s) of the presenter(s) (in both Japanese and English), 4) current affiliation and title (in Japanese and English), and 5) email address, phone number, and mailing address.

Presenters must be members of CAJLE. Membership information is available at: <http://www.cajle.net>

カナダ日本語教育振興会 2008 年次大会 (CAJLE 2008) 発表論文募集

カナダ日本語教育振興会 (CAJLE) では、発足 20 周年にあたる 2008 年度年次大会を「変わりゆく日本語と日本語教育の今」の大会テーマのもとに 8 月 15 日 (木) ~ 17 日 (日)、国際交流基金トロント日本文化センターにて行う予定です。本大会では日本語教育関連分野における研究論文発表に加え、基調講演、パネルディスカッションおよび教師研修会などを計画しています。また 8 月 18 日 (月) には希望者によるナイアガラ滝への見学ツアーも盛り込む予定です。

発表論文は、日本語学、日本語教育・継承語教育などの理論的考察、実践報告、また教材開発などを扱うもの、また上記大会テーマに沿った発表は特に歓迎いたします。またグループでの共通テーマに沿った発表も受け付けます。日本語による発表を原則とし、発表時間は質疑応答を含め 30 分とします。

ご応募は以下を電子メールの添付 (.pdf または .doc) にて下記までお送り下さい。

- (1) 発表タイトル (日本語および英語)
- (2) 発表論文の要旨 (日本語 1 ページ)
- (3) 発表者の氏名 (日本語およびローマ字)
- (4) 所属機関および役職 (日本語および英語)、
- (5) 電子メールアドレス、電話番号および郵便住所

大会発表申し込み先: shimojo@buffalo.edu (メールタイトルを "CAJLE 2008" で)

締め切り: 2008 年 4 月 10 日 (必着)

採否通知: 2008 年 5 月 10 日

当振興会規定により発表は当会会員に限らせていただきますので、非会員の方には発表にあたって入会手続きをお願いいたします。大会案内および CAJLE ホームページ: <http://www.cajle.net>